
傷身型恋愛形態

ロツツカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷身型恋愛形態

【Nコード】

N1936Q

【作者名】

ロツツカ

【あらすじ】

彼女の中では歪んでなどいない愛の形と、それに巻き込まれた被害者の一人の話。

「だって、だってえーくんがっ、私の事、嫌いだから、断るんでしょっ」

目の前でぐすぐす涙を流し、しゃがみ込んでいるのは俺の彼女。で、此処は俺の家。俺はソファで寝転がったまま彼女の話聞いてる。瞼が重い。どうしてこんな事になったんだろうか。

昨日は彼女とデートしていて、親が丁度出かけたからそれで俺の家に来ないかって話になって、まあ色々とかくくしがじかあつて現在に至る訳だ。朝、起きてから喧嘩になっている。現在時刻は午前九時。カーテンを閉めているために部屋の中は薄暗かった。

「どうせっ、私の事なんて何とも思っないんでしょ。分かるんだから」

そう言って彼女はまた泣き始める。そりゃあ朝まではそうだったさ。そうだった。彼女の事が好きだったけど。

問題なのは、彼女が血塗れたメスを握っていて、それと同じようなものが俺の腹にも刺さっているという事だ。

痛くないなんて事はない。今も傷口から血が溢れ出ている。が、何だか体がぐったりしたような感じで動く事ができない。普通刺されたら悲鳴ぐらい上げるものだろ、と思ったが、刺された時はビククリして何も言えないし、刺された後も悲鳴を上げる元気はなかった。

俺が何故刺されたのか。それは突拍子もない事を彼女に言われて俺がそれを拒否したからだ。この言葉だけ言っと批判をくらいいそうだが、こう説明するしかない。俺は被害者だ。

「だって、好きな人の指くらいっ、持ってたいのが当たり前じゃないっ」

この言葉を聞くのは三度目だ。一番最初に言われた時に拒否したら、突然彼女が泣きながら俺を刺してきたのだった。いくらなんで

も無理だ。鼻をすする音混じりに言われてもハイどうぞ俺の指差し上げます、なんて言える訳がない。大体指が欲しいだなんて普通の考えじゃ出て来ないだろ。

彼女の前髪は長い為、表情をうかがう事はできない。カーテンの隙間から入ってくる光が、彼女の右手にあるメスに当たって俺にぶち当たってくる。余計に目が開けられなくなる。頭がぐらぐらしてきた。瞼が重い。ひたすらに眠い。考えがまとまらない。

「やっぱりえーくんも前の人と同じなんだね。私の愛を受け止めてくれない」

常習犯かこいつ。よく捕まらないな。頭が重い。そんな愛受け止められるか。どんどん視界が暗くなる。さっきまで眩しかった光も消えている。駄目だ、眠い。

しかし眠るなど言わんばかりに、玄関のチャイムが鳴った。親はまだ帰って来ないはずだが、一体誰が来たんだろう。この家の住民である俺は動けず、彼女も泣きじやくったまま動こうとしない。「すみませーん」と気の抜けるような声が聞こえてくる。宅配便か。でも受け取れない。せいぜい手が少し動くくらいだ。腹からどんどん血が出てきている。

少し経つと声が止んだ。かと思えば、今度は扉を開ける音がした。嘘だろ鍵はかけた気がするんだが。もしかして泥棒だったらどうにも対処できないぞ。……この状況を見たら、寧ろ泥棒の方が逃げる可能性もあるが。

足音が聞こえてくる。こちらの部屋に向かってくるらしい。ソファの背もたれで扉が隠れて見えないが、彼女が顔を上げた事で誰かが部屋に入ってきたのは分かった。

部屋に入ってきた人はこの状況を見て声も上げず、かと言って逃げもせず、俺のすぐ後ろで立ち止まった。

それが分かった途端、俺の意識は遠のく。待ってくれ、おい。泥棒じゃなくてもせめて救急車くらい呼んでくれ。頭がふらつく。目がチカチカしてきた。視界が真っ黒になる。どうしようもなく、意

識が遠のいた。

目覚めた時、俺はまだソファに横たわっていた。いつの間にか毛布がかけられている。カーテンの外を見てみると、夕日が差し込んできていた。目の前にもう彼女の姿は無い。物音もしないから、多分帰ったのだろう。帰っている事を願う。

横に目を向けると、小さなメモ用紙が置いてあった。

「彼女からの別れのプレゼントだそうです」

その隣に、彼女が持っていた血塗れたメスが置いてあった。彼女の字ではなかった。部屋に入ってきた人の字だろうか。という事は、彼女とあの人は知り合いだったのだろうか。だったら何故あの人は此処に来たんだろう。

とりあえず誰かに知らせないとやばい気がする。そう思って起き上がろうとした時、すさまじい痛みが俺を襲った。刺されていた腹だけではなく、突き刺すような痛みが全身に感じられる。痛い。呻き声を上げながら毛布を捲ってみる。

俺の体のいたるところにメスが突き刺さっていた。

胸に、腹に、腕に、足に、無数のメスが突き刺さっている。抜こうにも腕を動かしても痛みが襲うので、なかなか行動を起こせない。勿論電話のあるところまで歩いて行って救急車を呼ぶなんて無茶だ。

よく見るとメモは、裏にも何か書いてある。震える手で捲ってみると、今度は彼女の字で一言書いてあった。

「最後に、私の愛を受け取って下さい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1936q/>

傷身型恋愛形態

2011年1月18日20時48分発行